

児童文化を主体的に学びたくなる授業計画の一考察

——学生の授業内課題の作成物を通して——

三島 秀晃

帝京短期大学 こども教育学科

【抄録】

【問題・目的】児童文化とは、子どもの心を育てる役割があり、その歴史や理論を学ぶことで、教師や保育士が子どもたちにとってより良い環境を構成するてがかりとなる¹⁾。本研究では、教材制作においては、主体的に学ぼうとするも、歴史や理論の講義については困難を抱える学生に対して、授業の構成を工夫し、理論や歴史についても主体的に学ぼうとする意欲が沸く実践例をみつけることが本研究の目的である。

【方法】本校の保育者養成コースにおいて前期に行われる「児童文化論Ⅰ」と「児童文化論Ⅱ」の方法を工夫し、それを比較して、学生の反応や作品の変化について考察する。学生の反応については、授業中に発せられた意見や感想を考察する。

【結果】前期科目の「児童文化論Ⅰ」では、児童文化財を作成するも、質問や意見はあまり出ることはなかった。しかし、理論や歴史を学んだ後ということから、幼児期の発達に焦点を当てた、実践的な作品が多く仕上がった。後期科目の「児童文化論Ⅱ」では、学生から質問や、感想が次々と湧き出た。しかし、理論や歴史を学ぶ前ということもあり、伝承遊びを語り継いでいくためのねらいは学生によって偏りが見られた。

【考察】授業の進め方としては、もちろん理論や歴史を学んでから演習に移行することが適切なものかもしれない。しかし、時にはその順序を逆転することで、新たな発見が生まれ、どちらにもメリットとデメリットがあることが明確に分かった。しかし計画的に授業の構成に変化を入れることは学生にとっても教員にとっても良好な刺激であり、これは様々な授業にも反映することが出来る有用な情報に提供するものと思われた。

【キーワード】児童文化、幼児教育、アクティブラーニング

I. はじめに

児童文化論の授業は、学校法人沖永学園帝京短期大学こども教育学科（以下本校という）で2021年現在「児童文化論Ⅰ」、「児童文化論Ⅱ」という科目名で1年次の前期、後期に卒業必修科目として開校されている。授業の計画としては、前期の児童文化論Ⅰでは児童文化財や児童文化施設などの歴史や理論を主に内容として組み込み、後期の児童文化論Ⅱでは、児童文化財の実践的な活用方法を内容として組み込んでいく。

しかしながら、2020年度の児童文化論の授業の様子を見ていると、実際に幼稚園での教育実習で使えるような教材たくさん作ってみたいと

いう意見が出た。児童文化論Ⅰでも2つ程実践的な教材を作製する内容を組み込んでいたが、学生は理論や歴史と並行して作りたいという意思を訴えてきてくれたので、2021年度には、児童文化論ⅠとⅡの編成を工夫し、歴史や理論を学んでから実際にその教材を作製するのではなく、逆に教材を作製してからその教材の歴史や理論を学ぶという形式をとってみた。この経緯については、以下の内容を踏まえ検討し、実施した。

平成24年8月に中央教育審議会は、「新たな未来を築くための大学教員の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において、学生が主体的、能動的学習（アクティブラーニング）の必要性を述べて

いる。これを踏まえ、平成 29 年文部科学省は、学習指導要領においてもアクティブラーニングが重要であることを示している。

このような根拠のもと、今回の授業の方法の改善と見直しを実践し、学生が意欲的に授業に参加する一つの方法を見出すことが本研究の目的である。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者

保育者養成校 1 年 31 名の学生

2. 調査時期

2021 年 4 月 1 日～2021 年 10 月 25 日の間に実

施をした。

3. 調査内容

(1) 2021 年度前期の児童文化論Ⅰの授業では、歴史と理論の講義をした後、実際にその児童文化財（手袋シアター教材）を作製する（Figure 1 から 3）。

(2) 2021 年度後期の児童文化論Ⅱの授業では、実際に児童文化財（かるた）を作製した後にその児童文化財の歴史と理論の講義をする（Figure 4 から 6）。

(3) 授業内の学生の態度や、制作物の意図を理解しているかなどを聞き取り、比較をする。アンケートは使用しないことから、できるだけ具体的な違いを結果に記す。

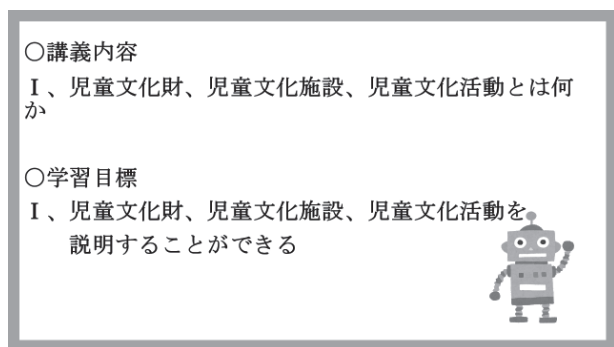


Figure 1. 児童文化論Ⅰ授業内パワーポイント資料 1

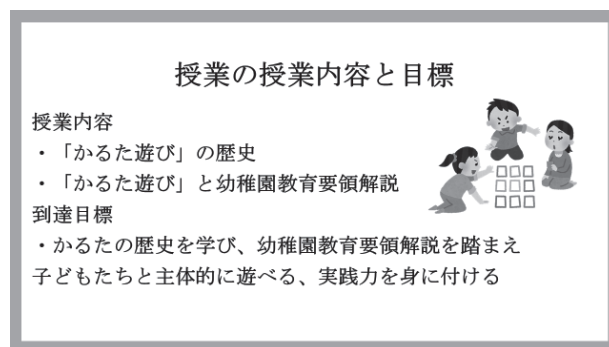


Figure 4. 児童文化論Ⅱ授業内パワーポイント資料 1

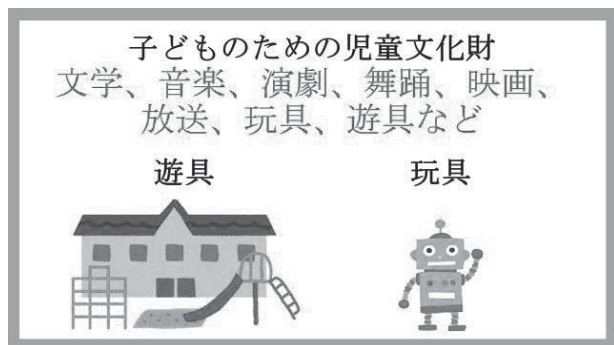


Figure 2. 児童文化論Ⅰ授業内パワーポイント資料 2



Figure 5. 児童文化論Ⅱ授業内パワーポイント資料 2

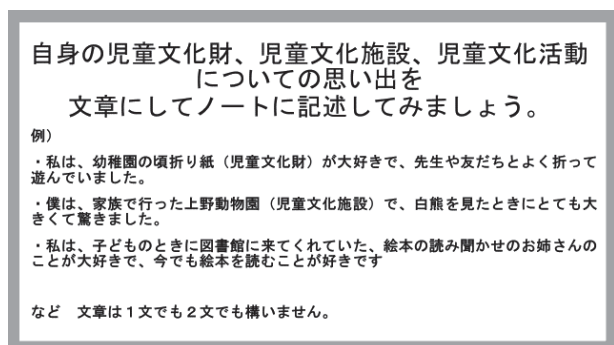


Figure 3. 児童文化論Ⅰ授業内パワーポイント資料 3

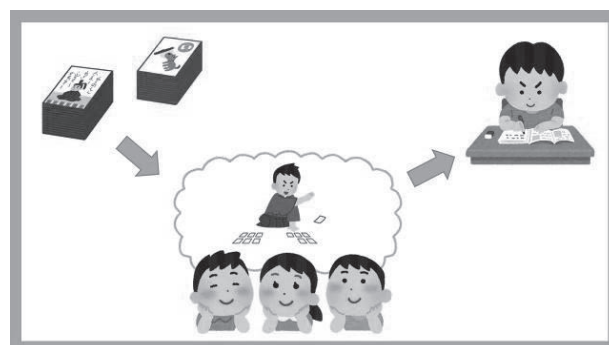


Figure 6. 児童文化論Ⅱ授業内パワーポイント資料 3

4. 倫理的配慮

「かるた作成物」を Figure として添付する学生を対象に、研究の目的や意義について口頭と書面で説明をし、さらに個人は特定されず不利益は生じないことを説明し同意書に記入を得た。

Ⅲ. 結果

1. 学生の反応

(1) 児童文化論Ⅰにおける手袋シアター

授業内容については、学生から質問などがでることはほとんどなく、淡々と講義内容をパワーポイントで使い説明する形式となった。アクティブラーニングを実践するも、新型コロナウイルス感染予防対策として学生同士のディスカッションを控えていることから、教師と学生ひとりひとりの質疑応答などを他の学生も一緒に情報を共有できるように進化した。その後、児童文化財の一環として手袋シアターを作製するも、学生同士間隔をとりながら一人一つの作品を作るので、学生同士の会話はほとんどなく学生自身で、教科書やITを活用しながら制作を進めていくという結果となった。(Figure 7から10)しかし、各自の作品の発表の際には、発表者と聞く学生とで間隔を十分にとり、発表者は自分の作品のアピールポイントを解説したり、失敗談を話したり、気に入ったポイントを伝えたりしていた。聞き手の学生には、自分も取り入れてみようと感じたことや、面白いと感じたことなど、ポジティブな感想を文章にまとめ提出するように課題を指示した。その後、自分以外の発表者に全員からの一人一人の感想を担当教員がwordでまとめ、名前は伏せて配布をした。そうすることで、自分では気づかなかった自身の作品の良さや、頑張りを他者に認められ「作って良かった」、「なんか照れる」、「教育実習で使ってみようかな」という感想が生まれた。しかし、前期授業終了後に、「あなたの身近なところにある、具体的な児童文化財を3つ挙げなさい」という質問に対して、手袋シアターと答えた学生はいなかった。

(2) 児童文化論Ⅱにおける伝承あそびかるた

授業の進行の情報提供として、まずはかるた制作を行い、その後、かるたについての歴史や、理論を解説した。前期の授業で児童文化財については、講義をしているので、細かな解説は割

愛し、各自、50音が1文字ずつ書かれたくじ引きを引き、その文字から始まるかるたを作るという内容を伝えた。学生の反応としては、作りながら教員を呼び、「5, 7, 5にするのですか」、「図書室で参考になる本借りてきても良いのですか」、「かるたは幼稚園だと何歳位からできますか」、「5歳児だと自分で書けるなら、教育実習で実践してみたいので、コツを教えてほしい」など、多くの質問や意見が寄せられた。前期の授業では作り方の詳細や、意義などを事前に伝えていたことからあまり質問をする姿はみられなかったが、このかるた制作に関しては、わからないことがあり、質問を要すること、他の学生の質問に対して耳を傾けることが自身の作品に影響を与え、自分の作品に新たな素材を加えてみたり、時にははぶいてみたりする姿も見られた。2コマ(90分×2回)を計画していたにも関わらず、1コマと20分(110分)で欠席者以外全員が仕上げることができた(Figure 11から14)。

2. 学生の作品

(1) 手袋シアター

軍手とフェルト、木工用ボンド、グルーガンなどを用意し、授業ノートにレイアウトを描き、準備物が決定した学生から制作に入るという段取りを組んだ。テーマは、「幼稚園実習で活用できるもの」として、個性的な作品がつけられた。Figure 7は、子どもたちに手袋シアターを使って、オムレツの材料や作り方を紹介し楽しむというものである。Figure 8は、手袋シアターを使って好きなものを5つ決めて、それをフェルトで切り貼りし、「わたしの好きなものを紹介します。これは为什么呢？」と示している指を子どもたちに見えるようにして問いかけながら一緒に遊ぶというものである。Figure 9は、0歳児から5歳児まで遊べるもので、親しみのあるキャラクターであるアンパンマンを選び、なおかつ素材がフェルトであることから乳児が触れても安心ではないかという配慮がほどこされていた。Figure 10はお母さんやお父さんが出でくる手遊びを子どもたちと一緒に楽しめるものである。色や素材にも特徴があり、衣装を変化することもできる仕組みになっている。

(2) 伝承遊びかるた

同じサイズに切った白い画用紙を配り、授業ノートにレイアウトを描き、準備が出来た学生

から作り出し、描き上げた学生からラミネート加工を行い仕上げるという段取りを組んだ。Figure 11 は、「く」という文字を引き、自分の中で「くじら」というイメージふくらみ、イラストや写真をインターネットで検索し、自分の好みのイラストを参考に描いている。5・7・5の文字を描いた後に「く」が二行目にきていることに気づき教員に確認にきたが、本人も自身の作品に納得していたことから仕上げに入った。Figure 12 は子どもたちが生活をする中で何気ない自然現象に気を留め、それを視覚的にわかりやすくなるようにイラスト化し、興味を持てるようになるように作られている。Figure 13 は、学生自身の学生としての生活を冗談を交え教員へのメッセージを込めて作成したものである。ちょうど昼休憩の時間を表現している所もポイントだそうである。Figure 14 に関しては、のどじまんのテレビ番組での風景を面白おかしく表現しており、子ども向けの内容ではないが、作成した学生は、授業内で数枚作成し、作るごとにクオリティが上がったそうである。



Figure 7. オムレツ作り



Figure 8. 自分の好きなもの紹介



Figure 9. アンパンマンの手遊びシアター



Figure 10.



Figure 11.



Figure 14.

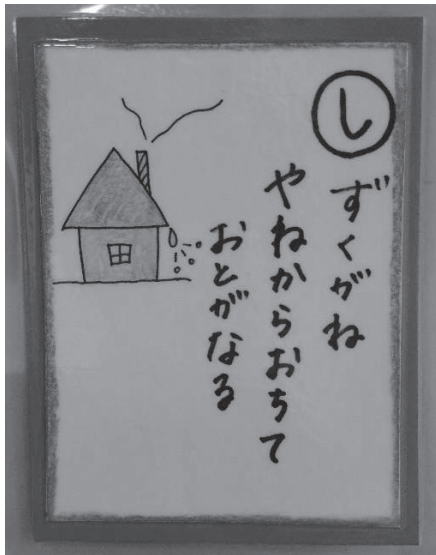


Figure 12.



Figure 13.

IV. 考察

1. 前期児童文化論 I

(歴史や理論を学んでからの児童文化財「手袋シアター」の作製)

学生の作品の完成度としては、授業内容を踏まえ、教科書と授業ノートを照らし合わせながらレイアウトを考えることで、教育実習先（幼稚園）で、実践できそうな作品が仕上がったと考えられる。

一方、学生たち同士の協力する姿は見られず、個々が黙々と製作に取り組んでいた。このことは、感染予防対策のため意見交換を行うことができない環境的側面や本科目の開講時期が入学直後であり、学生同士や学生と教員との人間関係が構築されていないといった要因であったと考えられる。

また、学生が製作した作品は、教科書や参考書において示されているものを模倣したものが多くみられ、オリジナリティーのある作品は、ごく少数であった。学生が自ら制作物のアイデアを考案し、主体的に取り組めるようにするためには、様々な制作物に触れることやアイデアを考案するための十分な時間の確保といった環境設定や講義内容の工夫が必要であると考えられる。

1. 後期児童文化論Ⅱ

（「伝承遊びのかるた」制作をしてから、歴史や理論を学ぶ）

教員や学生同士の関係性も深まり、自分をアピールすることに抵抗がなくなったようにも感じられることが、学生の作品が個性豊かに仕上がった要因であると考えられる。感染症予防対策から、2020年度に比べるとまだ、学生同士のコミュニケーションは控えつつ授業を進めていたが、間隔をとり、互いの作品を見せ合ったり、認め合ったりしながら進めることで主体的に行動し他者の作品から刺激を受けることもできたのではないかと考えられる。

しかし、伝承遊びのかるたを、単語のみで記入していたり、手紙の様に長い文章になっていたりする作品もあった。その後、理論と歴史を学ぶ際に前期に比べ主体的な姿がどのくらい見られたかを項目別で、具体的に表すことが今後の課題である。

V. おわりに

学校教育において、アクティブラーニングの重要性が謳われているも、現状（新型コロナウイルス感染予防対策）では、学生同士意見を交わし合ったり、コミュニケーションをとったりしながら授業を進めていくことは避けて通らざるを得ない。

その様な状況下で、オンライン授業を実践している養成校ではアクティブラーニングについて様々な工夫がされている。しかしながらその方法に試行錯誤しながらなかなか適切なオンラインを活用したアクティブラーニングは現在も模索中であることが、論文検索をされていてわかった。

本校では現状、感染症対策（マスク着用の徹底、毎日体温を測定し、健康管理表をつけるなど）を行いながら対面授業を行っていく方針である。そのために今後も、学生が主体的に学びたくなる授業の進め方を検討していく必要があると考えられる。

【謝辞】

本研究にあたり、ご協力いただきました保育者養成校1年31名の学生の皆様に感謝申し上げます。

【参考文献】

- 1) 皆川美恵子 武田京子（2018）新版児童文化 ななみ書房、1-14
- 2) 学研（2019）幼稚園教育要領ハンドブック、16-17
- 3) 文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説、233-247
- 4) 川勝泰介・浅岡靖央・生駒幸子（2017）ことばと表現力を育む児童文化 萌文書林、2-14

Lesson plans to promote proactive learning of child culture

—Focusing on students' works for in-class assignments—

Hideaki MISHIMA

Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

【abstract】

【Introduction】 Child culture fosters children's minds. Childcare teachers and childcare workers can understand how to improve children's environment by learning the history and theory of child culture. However, some childcare students have difficulty learning from history and theory lectures, even though they can proactively develop teaching material. This study was designed to improve lesson plans to motivate childcare students to learn history and theory proactively.

【Methods】 We revised two courses; "Theory of Child Culture I" in the first semester and "Theory of Child Culture II" in the second semester of a nursery-school teacher training school. Then, we compared students' reactions and changes in their work by examining opinions and impressions expressed by students in their classes.

【Results】 The students developed child cultural artifacts in the "Theory of Child Culture I." However, they only asked a few questions and only expressed a few opinions. Nevertheless, they could create practical works focusing on early childhood development because they had learned theory and history. On the other hand, students asked many questions and expressed many opinions in "Theory of Child Culture II." Nevertheless, their understanding of traditional play, handed down over generations, differed according to the student because they had not learned theory and history previously.

【Discussion】 We concluded that it might be appropriate to learn theory and history first and then conduct practice. However, we can sometimes discover new knowledge by reversing their order. Both types of lesson plans had merits and demerits. Systematically changing lesson plans provides positive stimuli to students and teachers, which is a significant finding that should be used in other courses.

【Key words】 child culture, early childhood education, active learning